



編集後記 From Editor

大阪・天満橋から見る
中之島の夕景

先日京都に行ったときに聞いた話だが、美しい自然の風景の代名詞である「山紫水明」という言葉は、もともとは夕暮れの頃の時を指した言葉なのだそうだ。

鴨川べりの、丸太町橋の北西に、川原に面して茅葺き屋根の建物がある。そこは、江戸時代後期の儒学者である頼山陽の書齋だったところで、後に幕末の尊王思想に影響を与えた歴史書「日本外史」を完成させたのもこの場所だという。

山陽は晩年をここで暮らして、毎日、比叡山や東山の峰と鴨川の流れを飽きずに眺めていたという。本の執筆だけでなく、川風に吹かれながら友人たちと酒を酌み交わしたりもしたそうだが、そんな友を誘うときに、「山紫水明の頃においでください」というような手紙を書いて送ったらしい。つまり「山紫水明」という言葉は、もともとは、夕日に照らされて山が紫に染まり、川の水が明るく輝く夕方の時間帯のことを指す言葉だそう。その頃の光景が素晴らしく美しいところだったので、山陽自身もこの場所を「山紫水明処」と呼んでいた。今は川の向こう側に、ちよつと興ざめするような建物がいくつもあるが、それでも、山並みや川面は当時のまま我々の目の前にある。時代を超えて、その土地が持つ本来の姿のようなものがまだ残されているような気がした。

編集部のおフィスがある大阪・中之島付近でも、夕方にふと気づくと、あちこちが茜色に染まっていることがある。川面やビル街が夕日に照らされていて、思わず見とれてしまうこともある。特に彼岸の頃には、東西に伸びる道路や川筋に沿って、真っ直ぐに強い日差しが射し込んでくる。もともと大阪は西側が海に開かれていて、昔から夕日の名所として知られた場所である。かつては、上町台地のあちこちから、西の海の中に太陽が落ちていく雄大な光景が見られたそう。

季節や時間の流れの中で、普段はビルや堤防などの人工物の中に隠れてしまっているものが、時々ふと顔をのぞかせるような気がする。自分が働く街や、家族とともに生活する場所には、どこにでも多分そこしかないものがあるだろう。日常の暮らしや移動に便利なのに越したことではないが、それだけでなく、その場所が本来的に持つ何ということのない価値をしっかりと感じ取りながら生活すると、また違う喜びがあるのではないかと。心豊かに暮らすということの一つのヒントは、そんなところにもあるように思う。

——橋本佳也

表紙・裏表紙写真 家族の休日 / 園児たちの散歩 / 公園のグラウンドでランニング(芦屋・神戸)

CEL 82号 特集 ■ 現代生活者の住まい・生活観2007 - 持続可能性と生活満足 発行・平成19年9月30日 頒価1,000円(送料別途)

■発行 大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所(CEL)
〒541-0046 大阪市中央区平野町4-1-2

■発行人 多木秀雄 Hideo Taki

■編集人 橋本佳也 Yosbinari Hashimoto / 弘本由香里 Yukari Hiromoto

編集 ● 関西ビジネスインフォメーション(株) 内 CEL編集室
〒530-0005 大阪市北区中之島3-2-18
住友中之島ビル7F TEL.06-4803-2307

印刷・製本・日本写真印刷株式会社

RESEARCH INSTITUTE FOR CULTURE, ENERGY AND LIFE © 2007 OSAKA GAS CO.,LTD.

禁無断転載複写

本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも小社の見解を表すものではありません。

本誌・バックナンバーのコンテンツや当研究所の活動内容はインターネットホームページ[<http://www.osakagas.co.jp/cel/>]でご覧いただけます。

本誌に関するお問い合わせ、ならびにご購読申し込みや送付先変更等のご連絡は CEL編集室 Tel.06-4803-2307 Fax.06-4803-2210 cel@kbicom.net まで